ひまわりからのメッセージ

２９号

2013、8、20.

西濃圏域
発達障がい支援センター
ひまわり

発行人：中野たみ子

お盆に思い出すこと

お盆が近づくと、誰もが自分が大切に思っていた人のこと、亡くなってしまった人のことを思い出しますね。皆さんは誰のことを思い出されますか？

私は、ひまわり学園に赴任してから、二十六名の子どもたちと永遠の別れをしました。（もちろん、この学園以外の所でかかわった子どもたちも含めると、もっと多いのですが……）

その中の一人、Ｙくんのことを思い出すと、ある小学校の校長先生のことを感謝の気持ちと共に思い出すのです。

ある時、脳腫瘍ができて、手術をした男の子が歩くことも話すこともできなくなったので、学園でみてほしいという相談を受けました。おそらく手術後のＣＶシンドロームだったのでしょう。学園にしばらく通園している間に元の状態に戻ったのですが、唯一の心配は、腫瘍は取りきれておらず、ぶつかったりころんだりすることで死に直面することもあるということでした。

就学を前に幼稚園では責任がとれないと判断され通園を見合わすことになりました。では学校は……という時のこと、突然Ｋ校長先生が来園されました。

私は、「何かあったら責任問題になると思われるかもしれませんが、この子の命ある限り輝かしめることを考えていただけませんか」というようなことを申し上げると、「分かりました……」と一言おっしゃって帰られ、通常学級のお友だちと学ぶ道をつけて下さったのでした。

現在のように特別支援教育が叫ばれるよりもずっと以前のことです。Ｙくんは二年後に短い生涯を終えましたが、私は今でもＹくんの思い出とともに、Ｋ先生のことも思い出すのです。「責任」を一言ももち出さずに一人の命を大切に考えて下さったＫ先生のことを……。

「けじめ」の大切さ

講演の依頼がくると、最近の私は乳幼児期からの発達の話をするようにしています。学校の先生方には幼児期について話し、保育者の方には小学校に入った時の話をさせてもらって、子どもたちが乳幼児期からずっと育っていく過程を知っていただきたいと考えているからです。子どもたちは急に小学生になるわけではないし、突然五歳になるわけでもありません。あたり前のことですが、幼保一元化の折には、かなりの混乱もあったようです。幼稚園の五歳児だけを「教育」されてきた先生方にとっては、乳児は「おもり」という発言もとび出したと後に聞きましたが、子どもの発達の過程を知らない人は困ったものだとその時に感じたのですが、それは私たちが子どもたちのことを知らないということに一因があります。

お母さん方も、母親としての年令は、長子が二歳であれば母として二歳、子が六歳であれば母としての年令は六歳と考えて、子どもと共に成長していくのだと考えて下さるといいのではないでしょうか？

ただ、最近は定型発達のお子さんにも変化が見られるのです。ことばの遅れ、運動発達のおくれといったものではなく、社会性の幼さといったらいいのでしょうか。自分の要求を泣いて、あるいは行動で押し通そうとしたり、勝手に一方的に話しつづけたり、自分の気持ちに折り合いがつけられず切りかえができなかったり……。

子どもたちは、二歳頃に自分のつもりと大人の意図とのギャップにぶつかります。帽子をかぶっていつも散歩に行っているから、ママが帽子を手にしたということは、お散歩に行くということに違いないと思っていると、全くママにはその気がなく、ただ置き場所を変えただけだった……。そんな時に大泣きしても聞き入れてもらえなかったら、子どもはしぶしぶ我慢することになります。

このような子どものつもりは、色々な場面であらわれます。「積木をここまで積んでから…」とか、「〜をし終わるまで」というように、見通しをもった行動にもつながっていきますし、「これとこれ」という対の関係にもつながります。

このときの子どものつもりと大人の意図とのギャップが、子どもにとっては、自分の気持ちの折り合いのつけ方としての経験になっていくように思います。そして三歳の第一反抗期と呼ばれる自己主張の時期を乗りこえて、四歳半頃には「ボクはもっと遊びたいけどママが呼んでるからやめる」というように、「〜だけれど〜だ」という自己コントロールへと少しずつ進んでいくのではないかと思うのです。

もともと脳のしくみとして、この様な力が育って来るのが遅い子どもたちもいますが、育てる過程で、全て受け容れて王女様や王子様として子どもの思い通りにしていってしまう家庭も少なからず在るのではないでしょうか？

保育園に入ると、自分の気持ちに折り合いがつけられない子は、どうなるでしょうか？集団活動がとれない、自分だけ勝手なことをしているということになります。また、小学校では授業中に勝手なことをしている、離席などといったことも目立ってきます。ゲームにはまると、いつまでも終われないということも起きてくるでしょうし、大人になればギャンブルにはまってしまうかもしれません。

お母さんたちは「小さいから……」「そのうちに分かるから…」と考えておられるでしょうが、何でも自分の思い通りになるというように育った子が、大きくなったからといって、そんなに簡単に気持ちを切りかえていくことはできないのです。だから、まず家庭生活を見直してみて下さい。保育園からいつまでも帰れないお子さん、食事の時間になってもビデオやゲームからはなれられない子など、単に大人の都合で子どもを従わせるということでなく、自分で切りかえられるようにしていきましょう。

小学生であれば何時までで終われるか、本人に確か

めて、それより少し早目の時間を言ってみて下さい。子「七時まで！」母「お母さんは六時三十分には終わってほしいなあ」子「ダメ！七時」母「そうか、じゃあ、まん中をとって六時四十五分はどう？」というように、子どもの思いと大人の思いを調節しながら、「約束」を守れるように仕向けていきたいものです。大人は、「約束」と言いながら一方的に「六時三十分までだよ、分かった？約束だよ」と言うことが多いでしょうが、これは約束ではありませんね。

待つことも、大切な気持ちのコントロールです。でも「ちょっと待っててね」では、一体いつまで待てばいいのか、子どもたちには見通しがもてません。時計が読める子であれば、はっきり時刻を示してあげればいいと思いますし、その時に「お母さんが忘れていたら教えてね」と頼んでおくのもいいでしょう。そして待つことができた時は、ほめてあげることが大事だと思います。

お母さん方の中には、「私の言うことはきいてくれません」、「すぐ大声を出したり暴れたりするんです。だから好きなようにさせておくのが一番平和です」とおっしゃる方もいます。でも、ちょっと考えてみましょう。本当に、あなたのお子さんは社会に通用する適応力を身につけていけるでしょうか？家庭という小さな集団の中でさえ、自分の気持ちにコントロールがつけられなくて、どうして他人の中で生きていけるでしょうか？

大きくなればなる程、子どもは自分に都合のいい方向にもっていける方法を学んでいきます。我が家の三歳八ケ月は、すでに甘えられる人も甘える方法も知っていて「大泣きすれば通してくれる人」と「聞いてくれる事、聞いてくれない事のある人」も知っています。それが子どもです。

何年か前に、新居浜にあるトモニ療育センターを訪ねたことがあります。そこは、自閉症スペクトラムのお子さんたちが個別療育を求めて全国から通ってきます。所長の河島淳子先生は小児科の医師で

すが、お子さんが自閉症とわかった時点からお子さんを育てることに専念し、今では独特の教育法を実践している方です。

指導の実際を見せてもらうことになった私たち（三人いました）の前に小学生のお子さんが現れました。いつものように指導を始めようとした矢先のこと、突然その子が大声を出し始めました。勉強をしたくないというアピールです。よく見ていると大声を出しながら、私たちの顔をチラッと見て、先生の顔もチラッと見ています。「こんなことは、はじめてです」とおっしゃるセンターの先生の表情を見て、私たちは無視を決め込みました。子どもの方を見ず、まるでその場にはいないかのように知らん顔を通したのです。どの位の時間がすぎたのだったか忘れてしまいましたが、間もなくその子は大声をあげるのを止めて学習に向かいました。センターの先生は、「勉強はやります」と、余り感情を出さず、どちらかというと低い声で、冷静に話されていましたが、私たちには見習うべき点であると思いました。

中学生や高校生、成人された方の相談も入ってきます。母子一体だなあと思うような親子もあるしお母さんだけが家で困っていると訴えられるケースもあります。

推測するに、おそらく小さい時から何らかの育てにくさがあったのではないかと思います。何度「ダメ！」と言ってもわかってくれないとか、勉強は皆と一緒にやれていたけれど、友だちを作るのは下手だったとか、すぐに怒り出して手がつけられなかったので、本人の要求をついつい通してしまったとか……。あるいは、感覚の過敏さがあって、音に敏感で赤ちゃんの時から大変だったとか、掃除機やトイレの手洗いの時が大変だったとか、逆にけがをしても痛がらないので我慢強い子と思っていたけれども治りかけるとカサブタを取ってしまって困ったとか……。あげてみると、きりがない位だったかもしれません。

けれども、子どもたちは、年令があがれば上がる程むつかしくなってくるでしょう。最初は、ショッピングセンターでお菓子を買うだけだったのに、おもちゃになっ

て、次にゲームになり、自転車になり、バイクになり、パソコンになり……結局、要求を通さない親が悪いとなって、「お前のせいで俺はこうなったんだ！」と、一生けん命に育ててきたつもりだったのに、お母さんがせめられることになってしまうケースもあります。「そうならないために、常に子どもに寄り添ってきたんです。」ということばを何度聞かされてきたことでしょうか……。

私も、又、こういう文章を何度書き、何度言ってきたことだろうか……と考えています。

私たちは、人間の社会で生きています。幼い子はどんな仕草もかわいくて、何でもこの子の言う通りにしてあげたいと思われるでしょう。保育園や幼稚園の先生方は、小学校の先生とは違う子どものかわいさを感じとっていらっしゃるでしょう。でも……何でもいいわけはありません。子どもの気持ちに寄り添い共感しつつも、やってはいけないことを教えてほしいと思います。「それは個性です」とおっしゃる大人もいらっしゃいますが、ある程度、まわりの人たちが受け入れていける程度の社会性やコミュニケーション能力を育てていくことは、私たち大人の責任ではないのでしょうか？

家庭と園、家庭と学校は両輪であると思いますし、お母さん一人が悩み、せめられ、苦しまれることがあってはならないと思いますが、最近は、おむつを外すのも園、からだを育てるのも、何もかも他人まかせということもあると聞きます。

まず、お母さん自身がお子さんのことを知ること、園や学校の先生と共通認識をもつこと、そして社会で生きていくために、自分の子にどんな力が必要なのか、どんな点に気をつけて育てていくべきか、方向性をさぐってほしいと思います。

自分自身の欲望や要求、困難や辛苦にどのように気持ちのけじめをつけていくのか、誰にとっても大切なことですよね!! 人間として……。

九月例会は九月十日(火)九時半～です。